活動報告書 2017

環境に左右されない楽しい学びの場を
すべての子ども・若者へ

特定非営利活動法人
Kacotam

「自分の素を出せる場所ができたから、ためてるものがなくなった」

高校３年生Ａさん
中学３年生からエルプラザ拠点等へ参加。
カコタ部の写真部に所属している。

自分の素を出せる場所ができた

カコタム来る前は、やっぱり家のこととかは言える人いなかったから、なんかやっぱ嫌なことがあっても全部我慢しなきゃいけないから、そういうところでストレスがあったけど、カコタムに来たら聞いてくれる人がいるから、話すことでそのことについて整理して、自分なりにいい方法を見つけたりとかできるから、自分の精神がわりと落ち着いた。

人見知り激しいから、ほんとに特定の人としか仲良くなれなかったけど、カコタム来たら色んな学年の人とかと友達になれたり他の学校の話とか聞けたりして、充実してる。

今年印象に残ってるのは写真部

（メンバーと他の子どもの）知らなかった一面見れたりするかな。勉強してるときに関わるってのが一番多いから、みんなでどっか出かけてっていうのが新鮮。最初の頃は、カメラの設定とかあんまいじんないでただ撮ってるだけだったから、設定の仕方とか教えてもらって、よりカメラのこと知れたし、写真もきれいだった。

「自分の子どものときにこういう人がいてくれたらなって思います」

社会人メンバー 飛島さん 活動歴５年
大学生の頃から複数のスタサポ拠点に参加。
学ボラ事業でも複数の施設で精力的に活動中。

話し相手としての役割

みんなで和気あいあいと話ができるのは、カコタムのすごく良いところ。もともと私は勉強が好きなほうではなかったので、子どもの話し相手としての役割が強いかもしれないです。最初の頃は子どもとうまく話せず、とても緊張していました。もっとこう関わればよかったかなと思う事もありましたが、そういった過去を忘れないようにしています。

話を聴く姿勢を大事にしています

子どもに対して「自分はこう思う」と意見を返すことは大事だと思うけれど、子どもの話をさえぎらないなど、話を聴く姿勢を大事にしています。自分の担当ではない子も気にかけるよう、意識的に努力していますね。

悩むこともあるけど楽しい

学生の頃は、自分の学びのためという動機が大きかったですが、社会人になってからは、子どものために何かしたい、力になりたいという気持ちが大きくなりました。子どもとの関わりは悩むこともあるけど楽しい。それがあるから今も続けています。

「満足っていうか、充実してるっていうか感謝でいっぱいなんです」

高校１年生Ｂさん
中学１年生からへるすたでぃ拠点等へ参加。
当年、受験カコタムに参加し、志望校に合格した。

職業に関して興味出たり、関心が深まった

進路とか将来のこととか全く考えてなくて、カコタムに来て、看護師の人の話聞きに行ったり、初音ミクの聞きに行ったり、職業のことに関して結構興味出たり、関心が深まったかなと思います。

高校入って、料理部に入って、そっから料理楽しいなって思って。それでよく考えてみたら、藤の人（調理メンバー）が食事を提供してくれてるってのを考えたときに、料理楽しいし、栄養士いいなって思って。

勉強する場を設けてくれた

家で集中できるほうじゃないから、勉強する場を設けてくれたっていうのは嬉しかったし、集中もできたから、それがやっぱり合格につながったのかなと私は思ってます。

感謝でいっぱいなんです

満足っていうか、充実してるっていうか、感謝でいっぱいなんです。イベントもいっぱい設けてくれるし、勉強もわかりやすく教えてくれるし、食事提供もあって、すごい幸せだなって思ってます。

「カコタムには多様なメンバーがいるから、見える世界が広がります」

大学生メンバー 木村さん 活動歴２年
複数のスタサポ拠点だけでなく学ボラ事業にも参加。
カコタ部の写真部、軽音部でも活動中。

一緒に学んでいこうという雰囲気

メンバーも勉強中にわからないことがあればそれを素直に伝えることで、子どもも「わからない」と言いやすい。完璧な人が相手だと子どもは「わからない」と言いづらいかなと思うので、カコタムはそういうところがいいなと思います。

メンバーの多様性が魅力

学生や社会人など、いろんな人がメンバーとして活動していて面白いです。子どもにとっても楽しいと思いますし、参加する社会って学校の中だけになりがちなので、カコタムへの参加によって接する社会が広がります。

そのまま受け止めて返す

相手を変えようとしない。そう接してます。誰しも無意識に相手を変えようとしてしまいがちです。例えば、悩みを聴くときに、「良くなってほしい、楽になってほしい」とつい思ってしまいますが、それも実は相手を変えようとしている。あくまでそのまま受け止めて返すよう心掛けています。

活動の行く先

ビジョン　すべての子どもが学びの機会に出会い、
自己実現に向けて挑戦できる社会

ミッション　環境に左右されない楽しい学びの場を
すべての子ども・若者へ

活動にかかわる社会背景

ひとり親世帯
生活保護世帯
児童養護施設

子どもが抱える困難
- 貧困
- 生活環境の乱れ
- 親の精神疾患
- 家事・アルバイトの負担
- 虐待による精神不安定
- 日々の我慢・諦め

→

学びの機会格差
- 不登校
- 中途退学
- 塾に行けない
- 部活動に入れない
- 習い事ができない
- 体験学習の不足

↳ 環境が原因で、自分の望む未来を実現できない子どもがいる
Kacotamはその中にある「**学びの機会格差**」問題に取り組んでいます

（図１）

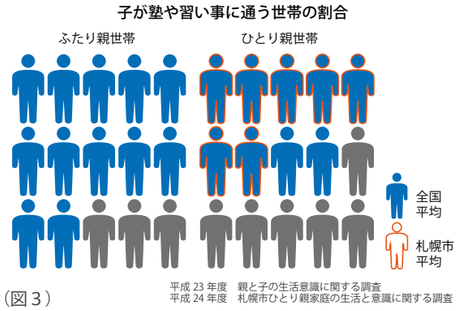
現在の日本社会では、図１で示したように、子どもが困難を抱え、機会の不平等に悩まされる傾向があります。私たちは学びの機会格差問題の解決を目指して活動し、子どもが自己実現に向け視野を広く持ち、前向きに取り組むことを応援しています。状況は人により様々ですが、例えば図２のように、習い事に通いたくても経済的理由で通うことができず、周囲から孤立していると感じてしまう場合などがあります。

困難な環境の下では学びの機会が不足します。例えば、ひとり親世帯とふたり親世帯を比較すると、学習塾を含めた習い事の機会に格差があります（図３）。さらに、札幌市のひとり親世帯は全国のひとり親世帯よりもその機会が少ない状況です。大学等進学率に関しても、全国平均とひとり親世帯、生活保護世帯、児童養護施設の間に差が生じています（図４）。これらの調査結果から、環境によってやりたいことの実現が阻まれている子どもの存在と、平等な学びの機会の必要性がわかります。

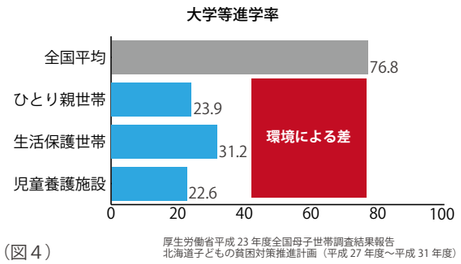
また、困難を抱えた状況下では、安心できる空間や周囲とのつながりが不足したり、自己肯定感・自己効力感が不安定になったりします。その結果、自己実現の機会があってもそれを利用する意欲が低下する傾向が強まり、将来への希望を失うことにつながります（図５）。

これを防ぐためには、安心できる居場所や、自分を受け入れ応援してくれる存在が重要になります。

（図２）



（図３）



（図４）

困難を抱えた状況で不足するもの

安全基地	安定した愛着関係のある人、安心できる空間が存在しないと、関心や意欲を持ちにくい、言い出せない
周囲との関係	周囲につながりのある人が少ないと、子どもが得られる情報、価値観、考え方などの量や幅が限られる
自己肯定感 自己効力感	自己肯定感・自己効力感が不安定だと「どうせ無理だ」と諦め、近くにある機会をつかめない

（図５）

事業概要

Kacotamでは、二つの柱を事業の中心に据えて活動を行っています。一つは「学びの機会保障」であり、もう一つは「自分が大事にされる居場所」です。これら二つを事業の柱とし、また達成するために、私たちは前年に続き当年も子どもに寄り添う事業を展開・活動してきました。

学びの機会保障

スタサポ

主にひとり親世帯・生活保護世帯など経済的な理由などにより十分な学習環境にいない子どもを対象に、それぞれの子どものニーズに合わせた総合的な学習支援を行っています。活動場所は、エルプラザ拠点、琴似会館拠点、へるすたでぃ拠点、ねっこぼっこのいえ拠点、ゆるきち拠点の５拠点です。

学ボラ

児童養護施設やファミリーホーム、母子生活支援施設等の社会的養護にかかわる児童福祉施設の子どもを対象とした学習支援を行っています。メンバーが施設に赴き、各施設のニーズに合わせて学習のサポートをしています。通年での学習支援に加え、定期テスト前の学習支援も実施しています。

スクールサポート

小学校から高校における子どもの学びをサポートする事業です。支援先学校の生徒全員を対象に活動をしています。現在は市立札幌大通高校で週１回程度、活動を行っています。「チャレンジベーシック」という、小・中学校の範囲の復習をする授業にメンバーが参加し、生徒たちと関わっています。

リラーニング

過去に経済的理由や家庭環境によって、学びたくても学べなかった若者を対象にした学習支援を行う事業です。高卒認定試験の合格を目指したり、日常生活を送る上で必要な技能を身につけたりすることを支援しています。

自分が大事にされる居場所

ゆるきち

中学１年生から 18 歳までの子どもを対象に、自分の考えや言動が大事にされるゆるい空間を提供しています。その場を基点にして、新たな学びの機会につないだり、子どもの「やりたい」をカタチにしたりすることで、自己実現に向けて挑戦できる環境づくりに取り組んでいます。

2017年の活動を振り返って

2017 年は、(1)各事業拠点の拡大、(2)「子どもの『やりたい』をカタチにするプロジェクト」の本格始動、(3) ゆるきちを基点としたつながる機会の充実、(4) カコタムシステム開発室の本格始動の 4 項目を目標に掲げて活動を進めて参りました。

各事業拠点の拡大

札幌ライラックライオンズクラブ 様のご支援により、学ボラ事業で関わる母子生活支援施設が、新たに 3 拠点増えました。また、NPO 法人陽だまりの家様からご依頼いただき、恵庭市にある「陽だまりの家」での学習支援活動を開始しました。拠点の拡大によって、より多くの子どもに学びの機会を提供できるようになりました。

子どもの「やりたい」をカタチにするプロジェクト カタチ化プロジェクトの本格始動

「子どもの『やりたい』をカタチにするプロジェクト」とは、学習支援を通した関わりの中で、子どもの「やりたい」という声を聞いたり、潜在的に秘められた「やりたい」を見つけたりして、それらをカタチにしていくというものです。当年、より多くの声をカタチにし継続的に実施するために、「カタチ化チーム」を立ち上げました。このチームによって、「初音ミクに会いに行こう！」、「ペンを訪ねて三千里」などの企画が実現しました。

ゆるきちを基点とした つながる機会の充実

ゆるきちを、居場所とすると同時に子どもの「好き・興味」を継続的に深められる場とするために、「カコタ部」を開始しました。軽音部・イラストサークル・写真部を立ち上げ、現在は約20名の子どもが所属しています。10月 1 日にはカコタ部発表会（→P11）も実施することができました。「カコタ部」は、それまでゆるきちに来たことがなかった子どもが来るきっかけにもなりました。

カコタムシステム開発室の本格始動

カコタムシステム開発室は、活動のシステム化や活動効率の向上、ノウハウの蓄積を図るために、①公式 Web サイトの構築とメンテナンス、②カコタムポータル（独自の情報共有システム）の構築 、③プログラミング学習会の企画・運営（カコタムラボと協働）を行っています。当年からSEのメンバーを中心に、本格的に活動を開始しました。

2017年の各活動紹介

スタサポ事業

スタサポ事業を開始して６年が経ちました。現在高校１年生のＡさんは、小学生の頃から６年間継続して参加しています。様々な理由で途中から来なくなってしまった子どもの中にも、受験や資格試験のために戻ってきた子がいます。子どもにとって、一度離れても、いつでも気軽に戻って来られる居場所としての役割も担うことができました。

また、当年は事情により、こども學舎拠点の活動が終了してしまいました。それに代わって、琴似連合町内会様のご協力のもと、琴似会館拠点を新たに立ち上げました。これによって、西区での学びの機会の提供を継続することができました。

学ボラ事業

母子生活支援施設すずらんでは、施設に入所している子どもだけではなく、退所後の子どもも継続して参加するようになりました。

児童養護施設南藻園では、これまでは定期テスト前だけの関わりでしたが、施設からの要望を受け、８月からは毎週訪問して学習支援を行うようになりました。

また４月から、札幌ライラックライオンズクラブ様のご支援により、母子生活支援施設もいわ荘（中学生２名）・あいりん荘（小学生７名、中学生２名）・しらぎく荘（小学生３名、中学生２名）で新たに活動を開始しました。

６月からは、興正学園小規模グループケアホームで新たに活動を開始しました。この施設の子どもの声をきっかけに、学ボラ事業で初めてお仕事カコタムを実施することができました。

●学ボラ訪問先の施設職員の声●

「学校の授業だけでは理解できない学習や、苦手とする学習をそれぞれの学習レベルに合わせて個々に親切に教えてくださるので大変助かっています。また、先生が話しやすいので子どももわからないところを聞きやすいようです。学習だけではなく色々な話を聞けるのも楽しいようです」

● 学ボラ訪問先の子どもの声 ●

「理科が苦手なのですが、苦手なところを教えてくれるのでありがたいです。そしてとてもわかりやすいです」

「話しやすい先生なので楽しく学習できるしわかりやすいです。これからもたくさん勉強を教えてほしいです」

（児童養護施設 興正学園）

ゆるきち事業

昨年立ち上げたゆるきち事業は、開始当初は平日の利用者が０名の日もありましたが、徐々に増え、これまでに延べ 826 名が利用しました。毎週必ず来る子もいて、地域の子どもの居場所として機能するようになりました。

ゆるきちでは、様々なイベントを企画しました。これまでの学習支援の枠を超えて、多くの子どもの「やりたい」をカタチにしたり、興味の幅を広げたりすることができました。

食物栄養学科の大学生が中心となり、子どもからの要望が多かったフォンデュやケーキ作りのイベントを企画しました。

材料を入れて転がすとアイスクリームを作れるボールを使い、近くの公園で雪上サッカーをしました。終了後カルシウムの食育を受けながらおいしくいただきました。

小型のコンピュータ「Raspberry Pi」や手軽にプログラミングができる「Google Apps Script」を使い、電子工作やプログラミングを楽しむ企画を実施しました。

高価なため中高生は手を出しにくい「コピック」マーカーやペンタブレットを用意し、イラスト教室を開催しました。イラストを通して子ども同士の交流も生まれました。

好きなマンガをプレゼンし合い、投票によりベストスピーカーを選びました。ベストスピーカーが紹介したマンガは、ゆるきちの本棚に配架しました。

ゆるきちにギターを置いたところ、興味を持つ子どもが多かったことを受け、楽器経験のあるメンバーがギター教室を開催しました。

子どもの「やりたい」をカタチにするプロジェクト

初音ミクに会いたい！

「初音ミク」を開発したクリプトン・フューチャー・メディア株式会社様を訪問しました。憧れの「初音ミク」について、開発過程の秘話を聞いたり、AR 体験をしたりしました。参加した子どもは、興奮した様子で「密かに抱いていた夢が叶った。まさか叶うだなんて思っていなかったので、正直まだふわふわっと夢心地」などと話していました。また、社内見学をして、「（社員の方が）楽しそうに働いているのを見て、私もこんな会社で働きたいなと思った」と話す子どももいました。

ペンを訪ねて三千里プロジェクト

ぺんてる株式会社様を訪問し、「シャープペンシルの『オレンズ』はなぜ折れないのか」というテーマで、シャープペンシルの歴史や仕組みについて説明を受けました。クレヨンとパステル、製図用と普通のシャープペンシルの違い、新商品の「オレンズネロ」の裏話などを聞くことができました。中学２年生のＡ君は「『オレンズ』のデザインは、昔発売された『スマッシュ』をもとにしているんですか？」と質問し、「本当によく知っているね」と褒められていました。

星を見よう企画

子どもの「宇宙に興味がある」という声を受け、美香保公園で「星を見よう企画」を実施しました。札幌市青少年科学館様にご協力いただき、移動天文車や大きな望遠鏡を使って、木星や土星などを見ることができました。スタサポ・学ボラ・ゆるきち事業で関わっている子どもの他、近隣に住む子ども複数名が参加しました。

カコタイム

営業職ってどんな仕事？

観光情報誌を扱う会社で働くメンバーが、営業職について話をしました。「最初はペコペコ謝っているイメージがあったが、実際は違った」と、営業職のやりがいや楽しさを紹介すると、子どもは興味深そうに聞いていました。「担当する地域のことよく知れそうだね」などと、その仕事ならではの魅力に気付いたようでした。

テスト勉強講座

中学・高校に入学したての子どもが、初めての試験を前に不安を感じていることを受け、４月下旬、大学生のメンバーがテストの勉強方法について話をしました。自身の経験を伝えた上で「自分に合ったことをしよう」、「楽しめるとよい、不安でもよい」と呼びかけ、子どもは勇気づけられた様子でした。

受験カコタム

当年の受験カコタムは、中学３年生を対象とした「中学生受験カコタム」と、大学・専門学校等への進学を目指す子どもを対象とした「高校生受験カコタム」に分け、それぞれ隔週で実施しました。

中学生受験カコタムは、小テストとその解説を行ったり、テーマを決めて講義形式の授業を行ったりしました。メンバーがそれぞれの持ち味を生かして自分の得意科目を解説することで、様々なノウハウを伝えることができました。

高校生受験カコタムは、ゆるきちで実施し、それぞれの進路に応じて学力試験の対策や面接練習、出願手続きの支援等を行いました。

お仕事カコタム

保育士

保育士になりたいAさん（高校１年生）に、保育園以外にも保育士資格を活かして働ける現場が数多くあることを伝えたところ、「児童養護施設を訪問したい」と希望がありました。

そこで、児童養護施設柏葉荘を訪問し、保育士資格をもつ職員に話を聞いたり、実際に子どもと触れ合ったりしました。Aさんは今回の訪問を振り返って、「めっちゃ幸せな時間だった」と保育士に対する想いを膨らませていました。

薬剤師

薬学部志望のBさん（高校３年生）と、大学院で研究をしている薬剤師に話を聞きに行きました。高校生のときの勉強方法、大学での研究、薬剤師の仕事、奨学金や学費などについて質問しました。Bさんは「オープンキャンパスでは聞くことができなかった細かい話、卒業後のことについて聞けて良かった。高校３年生で進路を迷っている自分も肯定できるようになった」と言っていました。

ウェディングドレスデザイナー

ウェディングドレスデザイナーになりたいCさん（中学３年生）と、ブライダルハウスBiBiを訪問しました。学ボラ事業で関わる子どもが、お仕事カコタムに参加する初めての取り組みでした。実際にウェディングドレスを見ながら、製作過程やカラーコーディネート等について説明を受けました。最後にドレスを試着したCさんは、「（ドレスが）キラキラしている」と感激していました。

自然体験学習

手稲さと川探検隊、FRSコーポレーション株式会社と共催で、自然体験学習を実施しました。スタサポ事業、学ボラ事業に参加する子どもを対象に行い、手稲区の星置川と手稲山パラダイスヒュッテを訪れました。

星置川では実際に川に入り、網を使って魚やカニを捕まえました。手稲さと川探検隊による捕まえ方のアドバイスに、子どもはワクワクした様子で聞き入っていました。川遊びの後には、捕まえた生き物についての解説も受けました。

手稲山パラダイスヒュッテでは、バーベキューとカモフラージュゲームを行いました。自分たちで窯の設置や薪割り、火おこし、調理までを行う本格的なバーベキューは、子どもにとって新鮮な体験でした。食後のカモフラージュゲームでは、一人ずつ順番に林道に入り、自然の中に隠された複数の人工物（玩具や造花等）を探しました。難易度の高いアイテムを見つけたときは歓声を上げ、場所の答えを聞く度に「もう１回！」と再チャレンジするなど、子どもは自然の中でのゲームを満喫していました。

自然体験学習は、今年で３回目の開催となりました。カコタムの夏の恒例行事として定着しており、初回から毎年欠かさず参加している子どももいます。

料理教室

お子様ランチを作ろう

藤女子大学の学生メンバーが、料理を作るイベントを企画し、約20名の子どもが参加しました。お子様ランチの各メニューを役割分担して作りました。食後は、レクリエーションスポーツを楽しみました。それまで自分から話すことが苦手だった子どもが積極的にメンバーに話しかけたり、企画を通して仲良くなった子ども同士がゆるきちに一緒に来たりと様々な変化のあった一日でした。

シェフに学ぶ料理のコツ

元センチュリーロイヤルホテル調理長の田村様に協力いただき、本格フレンチを作るコツを学びました。子ども５名が参加し、ニンジンのクリームスープのパイ包み焼き、サンマのメダル造りタルタルソース添え、オムライス、フルーツグラタンを作りました。参加した子どもは「サンマをおろすのが難しかった」、「将来、料理人になりたい」と話していました。

「好き」・「興味」を継続的に深められる場

カコタ部

ゆるきち事業の始動により、普段の学習支援活動では見つけにくかった、子どもの「好き・興味」や「やりたい」を知る機会が増えました。そうした好奇心に応じて企画した、イラスト教室、ギター教室、写真撮影会の反響が大きかったため、これらを継続的な活動とすることにしました。子どもと一緒に名称を考えた結果、カコタムの部活動という意味を込めて「カコタ部」と名付けました。

継続的に「好き・興味」や「やりたい」に取り組める環境が整ったことで、勉強では評価されにくかった子が生き生きと自分の力を発揮できたり、興味の幅がさらに広がったりしました。また、普段関わりのなかったメンバーや、同じ趣味を持つ他の子どもとの繋がりもできました。

カコタ部発表会

カコタ部の活動を通して深めた「好き・興味」や「やりたい」を発表する場として「カコタ部発表会」を開催しました。支援者や保護者、他団体の職員等、多くの人々に向けて、軽音部のライブ演奏や写真部の写真展、イラストサークルの活動報告を行いました。

「この写真はどこで撮ったの？」、「これはどういう意味？」といった来場者からの質問に答えたり、ライブの曲間に感謝の気持ちを言葉にしたりと、子どもにとって貴重な経験が多くありました。学校や年齢が異なる仲間と一緒に作品を作り上げ発表したことで、大きな達成感や自信を得る機会になりました。

軽音部 『憧れ』をかたちにする場

バンド活動を始めるには、楽器の値段が高かったり、教えてくれる人や仲間を見つけにくかったりといった、多くのハードルがあります。軽音部では、楽器や練習場所を用意したり、楽器経験のあるメンバーが演奏方法を教えたりしながら、バンド活動の機会を提供しています。課題曲を決め、ゆるきちでパートごとに練習をし、月に１回程度、近隣の音楽スタジオを借りて合同練習をしています。

子どもの声

誰かと楽器を演奏する経験がなかなか無いから、一緒にできて嬉しいです。もっと上手くなって、もっとみんなと音楽を楽しみたいです。

イラストサークル 誰かと『一緒に』絵を描く場

色鉛筆やコピックを使うアナロググループと、パソコンでペンタブレットを使うデジタルグループに分かれて、毎回テーマに沿ってイラストを描いています。思い通りに描けなかったり、周囲からの発言に落ち込んだりしてやりたいことを諦めることのないように、イラストが得意なメンバーがコツを教えながら、否定されずに楽しめる環境を作っています。

子どもの声

私にとって絵を描くことは、悲しいとき、嬉しいとき、腹が立つとき…紙に気持ちを預けることができるものです。

写真部 日常の『見え方』が広がる場

テーマに沿って日常生活の中で撮った写真や、公園などに一緒に出かけて撮った写真を見せ合い、どのような考えで撮ったのか等をお互いに発表しています。それぞれの写真を見て話し合ったり、メンバーから露出や絞りの設定、撮影シーンごとのポイントなどを学んだりする中で、技術や知識、感性を高めています。

子どもの声

一人ひとり写したものが違っていて、みんなの特徴が出ていて面白いです。もっとカメラのことを学び、美しい写真を撮れるようになりたいです。

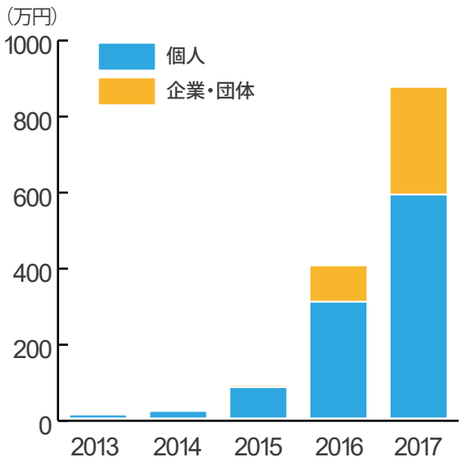
支援の輪

皆さまの多大なるご厚意により、当年の寄付金額は前年に比べ、個人からは約２倍、企業・団体からは約３倍となりました。寄付総額が800万円を超え、全収入における約７を占めるようになりました。これにより、助成金に頼らずに事業規模を維持するための基盤を整えることができました。また、金銭面以外も引き続き多くのご支援をいただきました。

より財務基盤を固めることで、2020年度までに、常勤職員を増やして運営体制を充実させ、活動の幅の拡大と質の向上に努めて参ります。

寄付金額

約870万円（前年比220%）



寄付金以外での寄付

- ハピぼんによる古本募金（10,790 円）
- 書き損じ未使用切手による寄付（35,647 円）
- 北海道日本ハムファイターズ無料観戦チケット
- イオン「幸せの黄色いレシート」（27,900 円分イオン商品券）
- ソフトバンク「かざして募金」
- 東川町、JA ひがしかわ よりお米提供
- おてらおやつクラブによるお菓子等寄付

支援者の声

数年前に「貧困により勉強する機会を失った子どもは７人に１人」という我が国の現状を知り、「この日本で！」とショックを受けました。そして私に何かお手伝い出来ることはないかと考えていた矢先、札幌地区でも同様の問題があり、カコタム理事長の高橋さんたちがその問題解決に向けて活動されていることを知りました。そこで一人でも多くの子どもがカコタムの支援を受けて夢や希望が叶えられることを願いつつ、微力ながらカコタムの活動を応援させて頂いています。

（北海道薬科大学名誉教授　早瀬幸俊）

支援いただいた企業・団体（敬称略・順不同）

TAKUSHOKU.
社会医療法人平成醫塾 苫小牧東病院
59. 北海道生活協同組合連合会
Sapporo Odori
FRSコーポレーション株式会社 Field Researchers corporation
手稲さと川探検隊 Teine Sato-kawa Tankentai
亜麻の花咲く あさぶ商店街
JA ひがしかわ
Simple Life & High Thinking スコーレ ユウ
海外進学・国内国際系進学準備校 SEA国際教育研究所 SCHOOL FOR EDUCATIONAL ALTERNATIVES
ハピぼん 古本募金 ハッピープロジェクト
札幌 サッポロッカ Promotion & Marketing
Coca-Cola 北海道コカ・コーラボトリング株式会社
つなぐ COOP SAPPORO
ねっこぼっこのいえ
札幌ライラック ライオンズクラブ
北海道日本ハム ファイターズ
北海道
国際ソロプチミスト札幌
北海道 東川町 写真の町 写真文化首都
KIWANIS INTERNATIONAL
琴似連合町内会

2018年の展望

認定NPO法人となる

寄付者が寄付金控除等による税制上のメリットを得ることができる「認定NPO法人」の申請を行い、認定を受ける。

団体としての社会への発信

講演会や行政への提言等の機会を増やす。これまで代表個人で行っていたが、団体として意見を外部に発信する。

組織体制の改善

専門家とのさらなる連携や、メンバーの団体への関わり方の多様化、各種チームの整理・再構築、事務作業の効率化によって、組織強化を図る。

代表メッセージ

当年もKacotamを応援していただき、ありがとうございます。皆さまのご支援により、継続して活動することができています。

当年はゆるきちやカコタ部など活動の幅が広がり、子どもとの距離感や関係性が多様になったことで、子どもが抱える問題に新たに気づけたり、その問題について子どもと共により深く考えたりすることができました。一方で「団体としてするべきことは何か」という考えと、「個人としてするべきことは何か」という考えのギャップに悩むことが多い一年でした。そういったときも、共に活動しているメンバーや様々な形で応援していただいている方々の気持ちに支えられ、活動を継続することができました。

10 月に参加した教育関係者が集まる研修会で、当団体の活動紹介をしたところ、「子どもにとって、その活動のねらいは何か」と問われました。子どもが一つの体験から何を学ぶのかは子どもによって異なり、こちらで設定するものではないと考えています。Kacotamは、子どもがそれぞれその瞬間で感じたこと、興味を持ったことを大切にし、普段の活動や企画に反映するようにしています。「子どもの『やりたい』をカタチにするプロジェクト」はその象徴です。

これからも子どもが抱える問題と向き合いながら、子どもがとことん「好き・興味」や「ギモン」を深められるような学びの場づくりに、これからも皆様と一緒に取り組んで参ります。

発　　行　特定非営利活動法人Kacotam
活動報告書制作委員会
（高橋・幾島・長内・木村・斉藤・中村・星野）
発行協力　北海道生活協同組合連合会
発 行 日　2018年3月21日